

ウルシから学んだもの

青森県立五所川原農林高等学校 森林科学科 2年 ○対馬 健太
杉田 旭
蝦名 優弥

1 はじめに

令和3年からは、青森県中南地域県民局の「TSUGARUうるし造成事業」に参加し、ウルシの植栽を通して森林整備について学んでいます。これまでに6回の植栽を実施し、延べ168名もの森林科学科の生徒が参加しました。今年の5月には、昨年と同様に弘前市乳井地区の果樹園跡地で、森林科学科の3年生と2年生の26名が、150本のウルシを植栽してきました。私たちは、このウルシの植栽を通して、ウルシに興味を持ち、もっと知りたいと思い、次のような目標と計画を立てて、研究に取り組むことにしました。



写真1 「TSUGARU うるし造成事業（青森県南津軽郡西目屋村）」の様子

2 取組・研究の内容

(1) ウルシの調査

ウルシは落葉広葉樹で、日本では約9,000年前から使用されており、木に傷をつけて採取した樹液を精製して、食器や工芸品、建築物などの塗料や接着剤として利用してきました。令和3年度の国内生産量は2tで、国産は消費量全体のわずか9%です。残りの91%を中国からの輸入に頼っていることに驚きました。

青森県はウルシの歴史が古く、弘前市を中心とした津軽地方では、300年前から取り組まれてきました。津軽藩の第四代藩主の津軽信政公が津軽の産業育成のために全国から多くの職人を招いたのがきっかけです。漆器の生産量は、輪島塗や鎌倉彫などには及びませんが、全国7位の生産地なのです。2017年には青森県で初の重要無形文化財に指定され、本県を代表する伝統的工芸品の一つになりました。

ウルシはキノコや山菜、薪炭材と同様に特産林産物であるため、栽培管理を継続して行うことで、農地転用をせずに植栽が可能です。植栽は果樹園の遊休地を利用していることから林地に比べて交通の便がよく、ウルシ掻き作業の利便性が高いなどの利点があります。



写真2 ウルシ林見学の様子（小西美術工藝社）

（2）ウルシ掻き現場の見学

令和4年10月に国産ウルシの75%を生産している岩手県二戸市のウルシ生産現場を見学しました。この現場は、株式会社小西美術工藝社が管理している果樹園の跡地で、若い職人さんが「カンナ」と呼ばれる道具を使って、樹液を採取していました。小西美術工藝社は、国宝や重要文化財の修復も手がけており、以前は日光東照宮の修復もした実績があります。会社を訪問して、保管されている樽を見せていただくと、精製された飴色のウルシがまるで生きているかのように見えました。いろいろと説明を聞いているうちに、一つの疑問が浮かび上がりました。それは、ウルシを掻き終えて伐採された木は、ほとんどが利用されずに放置されているということです。小西美術工藝社では、こうした木の有効活用を図るために販売していることを知り、ウルシの木を3本購入して学校に帰りました。



写真3 ウルシ掻き現場の見学（小西美術工藝社）

（3）ウルシの木材加工

令和2年から3Dターニングマシンによる新たな木工品開発をしています。特に、青森県産のヒバを利用した「枅」の商品化を目指してきましたが、升の水漏れ防止が課題となっていました。昨年の5月に、岩手県洋野町にある大野木工の職人さんから、木材加工を学ぶことになりました。木工職人の猫屋敷さんは、木材加工についていろいろと説明してくださり、水漏れ防止加工についても教えてくださいました。枅の表面と内部を丁寧に紙やすりをかけ、木固め塗料を3度塗って乾燥させます。その後、紙やすりを軽くかけて仕上げ塗料を塗り、さらに乾燥後に紙やすりを軽くかけたら完成です。数日後、枅に水を入れてみると、見事に水漏れはなくなりました。

こうして、いよいよウルシ材での枅づくりです。購入した木材は製材して計6本の角材になりました。この角材を3Dターニングマシンに取り付けます。この機械は、丸鋸と電動ドリルを組み合わせた簡単な機械で、外側は丸鋸で削り、内側は電動ドリルで掘ります。完成した枅はウルシの特徴であるあざやかな黄色が映え、ヒバとは違う味わいがあります。



写真4 木工品開発と大野木工様による出前講座（岩手県洋野町大野木工）

（4）林福連携

平川市にある就労継続支援B型事業所の「きりんの里」でウルシの植林をしていることを知り、お話を聞きに伺いました。ここでは、ウルシの種子から苗を生産して販売するとともに、その代金でウルシを掻き終えた木材を購入して木工品を作って販売していたのです。これこそが、私たちが目指していた資源循環型のウルシ生産です。事務局長の小林さんは、「私たちと一緒に活動しませんか」と声をかけてくださり、私たちも快く引き受けることにしました。



写真5 「きりんの里」への訪問の様子

11月にあおもり創造学の一環として、きりんの里の利用者さんと一緒に大鰐町にある山林で、ウルシの種子を採取することになりました。初対面で緊張しながらも、同じ作業をしていることで連帯感を感じながら採取することができ、貴重な経験となりました。その後、指導してくださった漆守の小林さんと一緒に、弘前市の相馬地区でウルシの下刈りをしました。小林さんは、「今後、果樹園の休耕地が増え続ければ、農山村の景観が失われ、廃棄物のゴミ捨て場所になってしまう。」と話していました。小林さんは、それを少しでも阻止するために、土地の所有者から土地を借り、短期間でウルシ生産が可能なウルシ苗を植えてウルシ生産に取り組んでいました。



写真6 「きりんの里」利用者とのウルシ種子採種（青森県南津軽郡大鰐町）

私たちは、12月に2度、農福連携に取り組んでいる、弘前市の福眞さんと鳴海さんの講演を聴くことができました。福眞さんは労働力重視、鳴海さんは経営改善と目的の違いはありますが、支援施設の利用者さん方を受け入れてリンゴ生産をしていました。福眞さ

んは、やがて、岩木山とりんご園と水田がマッチした素晴らしい景観が、このままは見られなくなることを危惧し、3年前に休耕地を購入して現在では6 ha を所有するリンゴ生産者になった方です。



写真7 鳴海さん、福眞さんの講演（五所川原農林高校）

（５）普及活動

これまでの取り組みは、森林・林業技術交流発表会（林野庁東北森林管理局）、青森県学校農業クラブ連盟大会、西北地区産業教育の発表会で発表し、貴重なアドバイスや激励の言葉をいただきました。



写真8 各発表会への参加

3 まとめ

①ウルシの歴史は古いものの、その生産量は少ない。②ウルシは、木材生産より短期間でウルシを掻いて収入を得ることができる。③休耕地を利用することで、山村の景観維持と山地保全に役立つ。④森林資源の有効活用と持続可能な林業ができる。⑤林福連携により、雇用の創出や林業の担い手不足の解消にもつながるなどがあげられます。

私たちは、林業従事者の減少は山林の荒廃につながることを実感しました。やがては、森林の多面的機能が失われ、自然環境だけではなく、私たちの生活環境にまで大きな影響を及ぼしてしまいます。この活動を通して、「林業を守るとは環境を守ること、環境を守るとは林業を守ること」だと学びました。青森県で唯一林業を学んでいる生徒として、これからも林業をモリ上げることを誓います。



写真9 「TSUGARU うるし造成事業（青森県平川市）」の様子